

県営ほ場整備事業（今浜地区）に係る埋蔵文化財発露調査報告書

宝達志水町

# 今浜墓田山遺跡

2005

石川県教育委員会

財石川県埋蔵文化財センター

いま はま はか た やま  
今浜墓田山遺跡

2005

石川県教育委員会  
財石川県埋蔵文化財センター

## 例 言

- 1 本書は今浜墓田山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は宝達志水町今浜地内（旧押水町字今浜）である。
- 3 調査原因は県営ほ場整備事業（今浜地区）であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤整備課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが、石川県教育委員会から委託を受けて、平成15（2003）年度から平成16（2004）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は、石川県農林水産部農業基盤整備課と、文化庁の補助を受けた石川県教育委員会が負担した。
- 6 現地調査は平成15（2003）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。  
期 間 平成15（2003）年9月4日～平成15（2003）年10月6日  
面 積 560㎡  
担当課 調査部調査第2課  
担当者 松山和彦（調査専門員）、白田義彦（課主査）
- 7 出土品整理は平成16（2004）年度に実施し、企画部整理課が担当した。
- 8 報告書の刊行は平成16（2004）年度に実施し、調査部調査第2課が担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は白田義彦が行った。  
第1～3章：白田義彦（調査部調査第2課主査）  
第4～5章：松山和彦（調査部調査第4課調査専門員）
- 9 調査には下記の機関、個人の協力を得た。  
石川県農林水産部農業基盤整備課、羽咋農林総合事務所（現中能登農林総合事務所）、押水町教育委員会、村井伸行
- 10 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1) 方位は座標北である。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
  - (3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

## 目次

第1章 調査の経緯と経過 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 遺跡の位置と地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の概要と遺構 .....	5
第1節 調査の概要 .....	5
第2節 遺構 .....	5
第4章 遺物 .....	8
第5章 まとめ .....	12

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置 .....	2	第5図 平面図・土層断面図 (S=1/60) .....	7
第2図 周辺の主要な遺跡 (S=1/25,000) .....	3	第6図 出土遺物1 (S=1/3) .....	9
第3図 調査区位置図 (S=1/2,000) .....	4	第7図 出土遺物2 (S=1/3) .....	10
第4図 調査区全体図・土層断面図 (S=1/400、S=1/60) .....	6	第8図 出土遺物3 (S=1/3) .....	11

## 表目次

第1表 周辺の遺跡一覧 .....	3	遺物一覧 .....	11
-------------------	---	------------	----

## 図版目次

図版1 完露状況	図版3 完露状況・出土状況・土層断面
図版2 完露状況・検出状況	図版4 遺物

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

宝達志水町今浜地内（旧押水町字今浜）で石川県が県営ほ場整備事業（今浜地区）を実施することになった。本調査箇所は水田として利用されていたが、水田の拡張整備を行うことになった。この事業に関して石川県教育委員会文化財課と石川県農林水産部農業基盤整備課との間で埋蔵文化財についての協議が持たれた。

その結果、事業実施前に埋蔵文化財の確認調査を行うこととなった。文化財課が平成14年11月15日と同19日に試掘調査を行った。試掘調査の結果、丘陵裾沿いに遺物包含層が認められ、遺跡への影響がおよぶ排水路部分の発掘調査を行うこととなった。今回の排水路部分の調査面積は560㎡である。尚、試掘調査の結果、今浜オキダ遺跡が新たに発見された。

平成15年度に文化財課は発掘調査を財団法人石川県埋蔵文化財センターへ委託した。これを受けて当センターは平成15年度に発掘調査を実施した。

## 第2節 調査の経過

8月11日に羽咋農林総合事務所（現中能登農林総合事務所）、石川県教育委員会文化財課、石川県埋蔵文化財センターの三者で発掘調査に関する現地打合を行った。

9月3日にユニット・ハウスを設置した。9月4日にバックホーによる表土除去作業を北側から行った。湧水が多かったので、表土除去は三回に分けて行った。一回目の表土除去は調査区約三分の一の面積のみに留めた。9月5日に発掘器材を搬入した。9月8日から作業員が出役し、遺構検出作業を開始した。9月10日から順次遺構を掘り下げ、平面図を作成していった。9月11日にバックホーによる2回目の表土除去を行った。2回目の表土除去で調査区全体の約三分の二の表土除去を完了した。9月18日に三回目の表土除去を行い、表土除去を終了した。9月22日に遺構の掘削を終了し、9月29日に実測図作成作業を終了した。

10月1日に発掘器材を撤収し、現地作業を完了した。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

今浜墓田山遺跡は宝達志水町西部に位置する。宝達志水町は平成17年3月1日に押水町と志雄町が合併して誕生した町である。宝達志水町の地形をおおまかに分類すると海岸線に沿ってのびる西側の砂丘台地、東側の丘陵と山地、その間に挟まれた沖積地・扇状地に分けられる。

東側の丘陵・山地には樹枝状にのびた小平野がみられる。本遺跡の南側を流れる宝達川は天井川、暴れ川として有名である。また、北側には相見川が流れ、両河川によって形成された扇状地（押水低地）と砂丘台地の境目に本遺跡は立地する。旧宝達川は砂丘台地の裾をぬうように流下していた時期もあったと思われる。

本遺跡の背後の砂丘台地には旧押水町の中心地があり、活動の場としての利便性が窺われる。本遺跡の背後の台地は古来からの活動拠点の存在が想定される地域だと思われる。

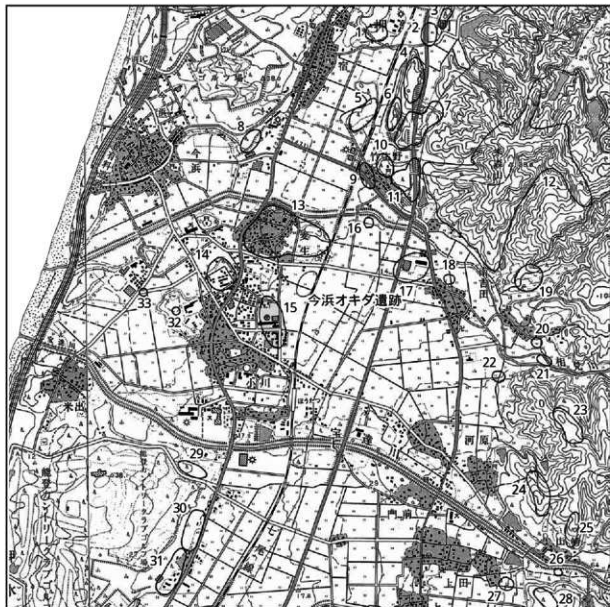


第1図 遺跡の位置

### 第2節 歴史的環境

周辺の遺跡の分布から歴史的環境を考えると東側の丘陵・山地には旧石器（岩宿）時代～縄文時代、古墳時代、中世の遺跡が多いようである。西側の砂丘台地上には奈良時代の遺跡が多い傾向が窺われる。その間に挟まれた平野には比較的遺跡が少ないようである。東側は比較的早くから活動痕跡がみえ、連続と現代まで続くようである。一方西側は奈良時代から活動が活発化するのではないだろうか。現在では中心的な施設は西側の台地上に多い。その間の平野は生産域として主に利用されていたものと思われる。平野の微高地には弥生時代以降の集落の存在が想定される。

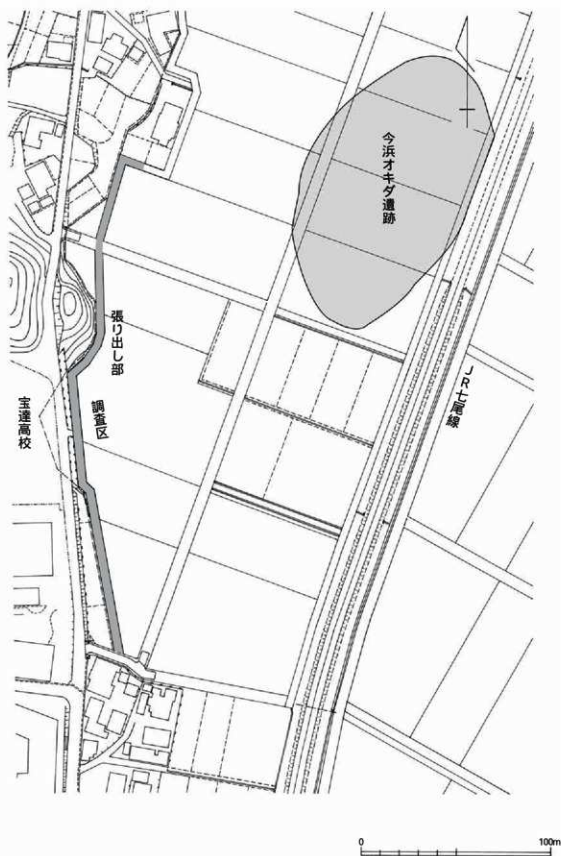
奈良時代を契機として活動拠点が東から西へ移っていくのではないだろうか。東側の中世の遺跡が多いのは修験道の山として有名な宝達山の関係だと思われる。精神的な活動の場としても東側が認識されていたものと思われる。西側が活発化した理由の一つは交易にあるものと思われる。おそらく、東側の生産物が西側に一旦集積され、各地へ運ばれたのであろう。西側は陸運とともに水運も利用でき、大量の物資を運搬するには西側の利便性が東側より高かったものと思われる。奈良時代からは全国的に生産活動が活発化する。宝達川水系、相見川水系においても何らかのアクションがあったものと想定したい。



第2図 周辺の主要な遺跡 (S=1/25,000)

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	礮ホシバ山遺跡	奈良	12	米森城跡	中世	23	南吉田向山中世墳群	中世
2	礮エソエ遺跡	奈良・平安	13	麦生遺跡	不詳	24	河原三つ子塚古墳群	古墳
3	礮エソエ山中世墳墓群	中世	14	今浜新保山遺跡	縄文・奈良	25	山崎横穴群	古墳
4	礮向山遺跡	旧石器-中世	15	今浜礮田山遺跡	古墳-平安	26	上田永輝遺跡	不詳
5	礮トリガヤマ遺跡	弥生-中世	16	麦生かわだ遺跡	古墳	27	上田地原方遺跡	縄文
6	礮東山古墳群	古墳	17	南吉田礮山遺跡	古墳-中世	28	上田狐塚古墳	古墳
7	礮東山遺跡	旧石器-奈良	18	南吉田穴田遺跡	不詳	29	小川A遺跡	不詳
8	麦生A遺跡	不詳	19	南吉田サンマイ遺跡	平安・中世	30	堂田遺跡	奈良-平安
9	竹生野フルヤシキ遺跡	古墳-中世	20	南吉田古屋敷遺跡	不詳	31	米出ドダヤマ中世墓	中世
10	竹生野天皇山1号墳	古墳	21	南吉田堂の庭遺跡	古墳	32	今浜A遺跡	弥生・古墳
11	竹生野遺跡	旧石器-中世	22	南吉田堂の後遺跡	古墳	33	今浜B遺跡	不詳

第1表 周辺の遺跡一覧



第3図 調査区位置図 (S = 1/2,000)



## 第3章 調査の概要と遺構

### 第1節 調査の概要

調査区は全長280mにおよぶものであり、北側端と南側に安定した地山面を検出した。北側は鞍部1以北で安定した地山面（暗灰褐色砂）を検出し、南側はSD5以南で安定した地山面（黄褐色砂）を検出した。調査区北端の標高は9.61mであり、南端は11.55mであり、地形は南側へ上っている。その間は鞍部や粘質の柔らかい地山面（主に灰褐色粘質土）が続いており、土層の堆積状況から判断すると湿地であった期間が長かったものと推定される。旧宝達川の河道がこの近辺まで来ていた可能性がある。水辺に営まれた古墳時代、古代の集落の縁辺部を調査したことになる。

### 第2節 遺 構

#### 1. 溝

- SD1 調査区の北側で検出した。幅約1.8m、深さ約50cmのものである。古墳時代の土師器の細片が出土している。
- SD2 SD1の南側で検出した。調査区の西側までは達していない。幅約50cm、深さ約15cmのものである。古墳時代の土師器の細片が出土している。覆土は淡灰色粘土である。
- SD3 調査区南側で検出し、幅約5m、深さ約80cmのものである。古墳時代の土師器の細片が出土している。
- SD4 幅約1.7m、深さ約70cmのものである。須恵器杯身（第6図1）と土師器高坏（第6図2）が出土している。杯身は7世紀前半のものだと思われる。その他、9世紀頃の土師の細片が出土している。
- SD5 SD4に切られている溝である。幅は広いところで約20cmである。深さは約25cmである。覆土は明灰褐色砂質土である。

#### 2. 小 穴

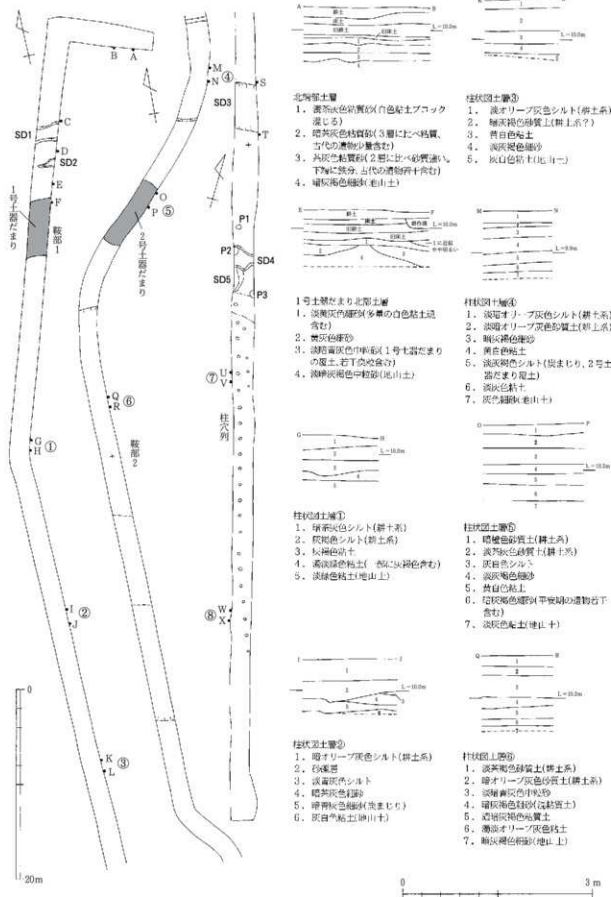
- Pit1 SD4の北側で検出した。直径約20cm、深さ約10cmのものである。遺構覆土は茶褐色砂である。
- Pit2 SD4の掘り下げ時に検出した。Pitの東側半分を検出し、直径約30cm、深さはSD4の底から約20cmである。覆土は暗灰色粘質砂である。
- Pit3 SD4の南側で検出した。Pitの西側半分を検出し、直径約40cm、深さ約25cmである。覆土は暗灰褐色砂質土である。

#### 3. 土器だまり

2号土器だまり 調査区ほぼ中央に地形の張り出しがみられるが、張り出しの下にあたる箇所を検出した。調査区と張り出し部頂との比高差は約5mあり、張り出しの先端から廃棄された土器群であろう。

#### 4. 鞍 部

鞍部1 SD2の南側で検出した。北側の肩付近に1号土器だまり（第6図3～第7図28）を検出



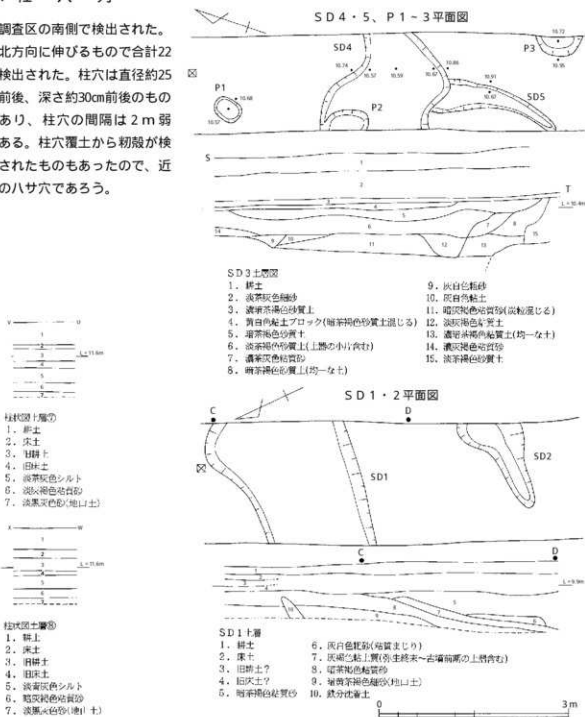
第4図 調査区全体図・土層断面図 (S=1/400・S=1/60)

した。土器は検出面から30cm前後の間に集中していた。7世紀前半頃と思われるものも含むが、主体となるものは8世紀後半～須恵器生産終焉にいたる土器群である。地形から判断すると村落域の縁辺にあたるものと思われる。この鞍部より北側の地山土は暗灰褐色砂であった。遺構はこの鞍部の北側に展開していたものと思われるが、SD1の断面図で分かるとおり、後世の削平により遺構面が削られてしまい、検出できなかったものであろう。

鞍部2 調査区の中央付近で約44mにわたり検出された。深さは約1.1mである。

## 5. 柱 穴 列

調査区の南側で検出された。南北方向に伸びるもので合計22基検出された。柱穴は直径約25cm前後、深さ約30cm前後のものであり、柱穴の間隔は2m弱である。柱穴覆土から初殻が検出されたものもあったので、近年のハサ穴であろう。



第5図 平面図・土層断面図 (S=1/60)

## 第4章 遺物

いずれも土器である。分量等については後掲の一覧表に譲り、ここでは要点を摘記する。

### 1. SD4出土遺物(第6図1・2)

調査区南部のSD4からは須恵器杯身1と土師器高杯2が出土している。前者からは7世紀前半(中葉)頃の年代が想定できる。その他にも9世紀頃の須恵器・土師器の細片が混じる。

### 2. 1号土器だまり出土遺物(第6図3~第7図28)

3~19が須恵器供膳具、20が土師器供膳具、21~23が土師器煮炊具、24~28が須恵器貯蔵具である。いずれも古代に属するが年代に幅がみられる。

須恵器25は7世紀前半頃に属するもので、当該期の土師器片も若干認められる。主体をなすのは8世紀後半から須恵器生産終焉に至る時期の資料である。まず、体下部がふくらみ断面嘴状の高台が八の字に開く有台杯9・10や、肉厚で腰部が丸みを帯びる無台杯12・14が古相を呈する一群といえ、有台杯8や無台杯16がそれに続く。体部が直線的に立ち上がる深身の有台杯7や無台の土師器盤20は9世紀前半頃に位置付けられよう。そして、器壁が薄く高台も退化傾向にある有台杯11や体部が大きく外反する無台杯17、加えて口縁端部が水平にのびる皿19が新相を代表する。なかでも19については、土師器生産に用いられる円柱技法に類似する技法で成形された可能性が指摘でき、注意を要する資料といえよう。一方、須恵器貯蔵具では、台付の短頸壺24、倒卵形の胴部に耳の基部がわずかに残る双耳瓶27、把手付の平鉢28などが出土している。

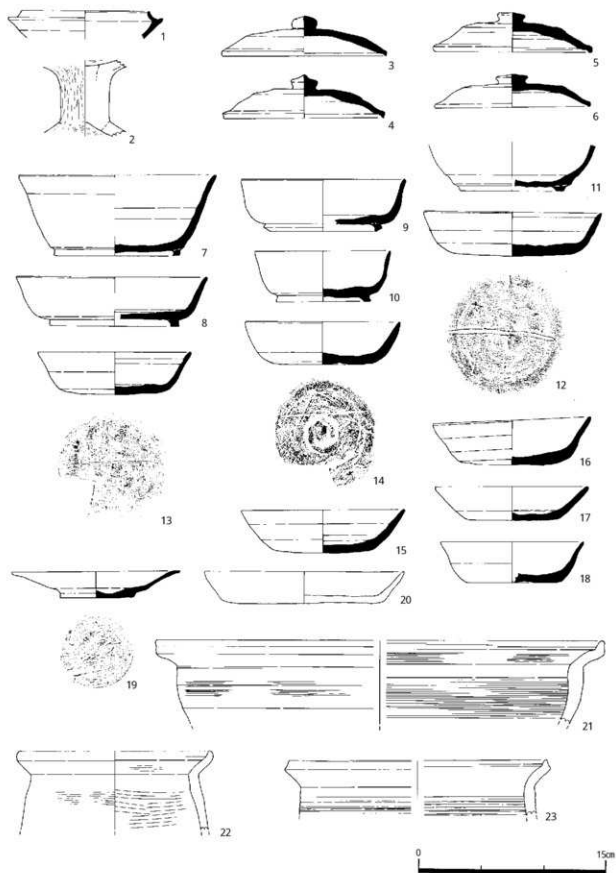
1号土器だまりは、低平な砂丘裾の緩斜面に想定される村落域と、その東に広がる宝達川旧氾濫原(中世以前は北西の相見川流域に流れ込んでいたと推定され、流路固定により天井川化)の境に形成されている。古代の宝達川の流路を砂丘の裾近くに復元できるのであれば、まさにムラの水辺にあたる場所といえる。砂丘地上では開墾等により古代の遺構面がすでに失われた可能性が高く、上記の遺物がかつて営まれたムラの年代の一端を探る手がかりになる。

### 3. 2号土器だまり出土遺物(第8図29~43)

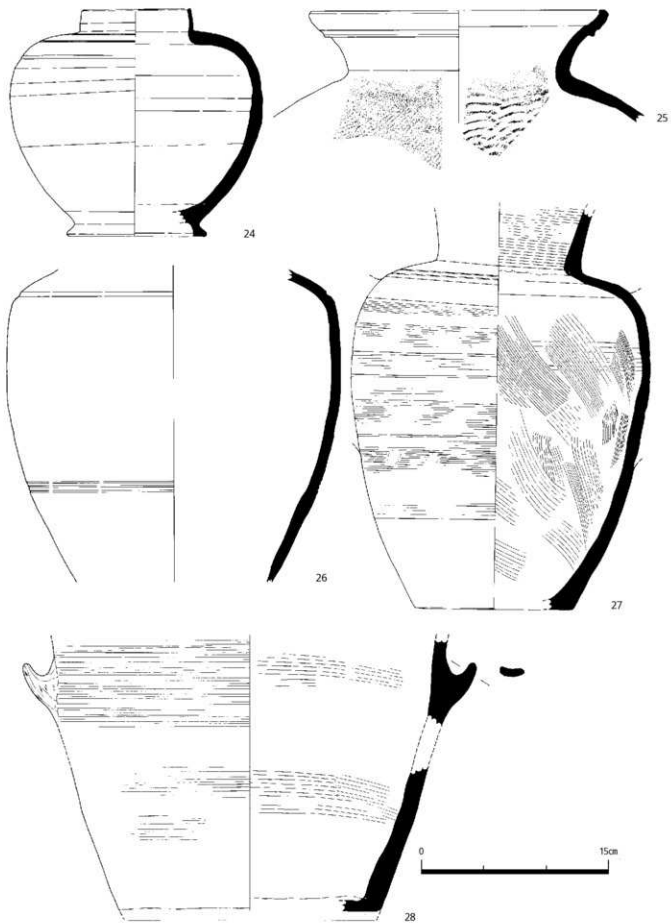
29~33が須恵器杯蓋、34~37が須恵器有台杯、38が土師器有台碗、39が須恵器瓶類の口縁、残る40~43が須恵器無台杯である。他に須恵器貯蔵具、土師器供膳具・煮炊具の破片も出土している。

まず、ボタン状の鈕が目立つ杯蓋には天井の外周のみにケズリが残るものも含まれるが、外面調整の基調はナデである。立ち上がり部が幾分丸みを帯びる有台杯では断面正方形の小さな高台が通有であり、口径11cm前後、器高4cm前後を標準とする。これ以外にも口径16cm、器高6cm余りの大型品がみられる。無台杯の立ち上がり部にも幾分丸みがあり、42の外底には墨書(判読不能)がある。なお内面の墨痕から転用硯と思われる杯蓋が31のほかにもう1個体出土している。

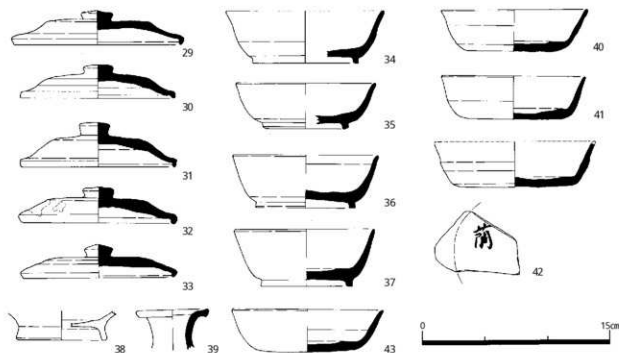
2号土器だまりは、東に張り出した砂丘尾根の先端直下に遺された遺物群である。付近は比高5mに近い急斜面となっている。或いは尾根筋が砂丘上の居住域と水田・水場・川舟の船着場などが想定される旧氾濫原とを繋ぐ通路をなしたとも考えられ、そのことが土器だまりの形成につながったと理解される。ここでの年代幅は1号土器だまりより狭く、概ね8世紀末葉頃をピークとするようである。



第6図 出土遺物1 (S=1/3)



第7図 出土遺物2 (S=1/3)



第8図 出土遺物3 (S=1/3)

種別番号	種別器種	出土地点	実測番号	口径 (mm)	底径 (mm)	器高 (mm)	備 考	
第6図	1	須恵器杯身	5D4	D-33	100			
	2	土師器高杯	※	D-39			杯部内底、脚部中実	
	3	須恵器杯蓋	1号土器だまり	D-7	129	31		
	4	※	※	D-17	126	34		
	5	※	※	D-4	122	31		
	6	※	※	D-16	120	26		
	7	須恵器有台杯	※	D-3	153	64	91	
	8	※	※	D-40	148	49	100	
	9	※	※	D-8	128	41	82	
	10	※	※	D-6	106	40	74 高台下部に丁字なナデ	
	11	※	※	D-35			81	
12	須恵器有台杯	※	D-14	138	35	90 外底にヘラ記号		
13	※	※	D-34	120	34	82 外底にヘラ記号、胎土粗悪		
14	※	※	D-2	122	34	84 外底にヘラ記号		
15	※	※	D-15	128	34	71 外底外周に丁字なナデ		
16	※	※	D-5	123	49	52 内外底にヘラ記号?		
17	※	※	D-9	120	26	70 黄灰色で軟質、体部大きく鋭く		
18	※	※	D-36	112	32	70 外底外周に丁字なナデ		
19	須恵器皿	※	D-10	132	21	57 口縁端が水平、円柱技法		
20	土師器碗	※	D-20	156	26	125 内面に丁字なナデ		
21	土師器碗	※	D-18	351		口径は推定		
22	土師器碗	※	D-37	150		外面被熱、内面ヨゴレ		
23	※	※	D-12	202		口径は推定		
第7図	24	須恵器焙輪管	※	D-11	84	180	106 脚部外面下部ロクローズリ	
	25	須恵器碗	※	D-42	232		7世紀の資料	
	26	須恵器瓶頸	※	D-13			内面にカキ目風のロクロナデ	
	27	須恵器双耳瓶	※	D-1			124	
28	須恵器鉢	※	D-19				軟質、底径20cm前後	
第8図	29	須恵器杯蓋	2号土器だまり	D-21	132	27		
	30	※	※	D-32	121	26	天井外周ロクローズリ	
	31	※	※	D-28	120	35	転用後?、外面黄灰	
	32	※	※	D-22	120	29	スズ状付着物、ロクローズリ	
	33	※	※	D-31	118	27	天井外周ロクローズリ	
	34	須恵器有台杯	※	D-38	124	41	84 胎土に細砂粒	
	35	※	※	D-25	108	36	60 ※	
	36	※	※	D-30	113	42	77 ※	
	37	※	※	D-29	109	45	72 高台下部に丁字なナデ	
	38	土師器有台碗	※	D-41			72	
	39	須恵器瓶頸	※	D-23	54			脚部が水平に開く
	40	須恵器有台杯	※	D-24	114	34	72	
	41	※	※	D-27	112	34	74 外底外周に丁字なナデ	
	42	※	※	D-43	126	36	98 外底に黄書「前」?、焼成軟質	
	43	※	※	D-26	118	34	84	

第2表 遺物一覧

## 第5章 ま と め

今浜墓田山遺跡は、地元在住の研究者の精力的な踏査によって存在が明らかになった遺跡である。その際に砂丘上から土器のほか、瓦塔や刀剣類なども採取されている。今回の調査は、主として内列砂丘の下、宝達川の旧氾濫原にあたる場所で行われた。主な成果としては古代の土器類がまとまって出土する「土器だまり」を2箇所検出したことをあげ得る。かつての集落域の立地が想定される砂丘上での地形の改変が著しい現在にあって、そこから廃棄されたであろう遺物群の発見は、間接的ながらも当時のムラにおける生活の一端を窺い知るための手がかりを提供してくれるものといえる。

### 報告書抄録

ふりがな	ほうだつしみずちょういまはまはかたやまいせき							
書名	宝達志水町今浜墓田山遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（今浜地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	白田義彦 松山和彦							
編集機関	財団法人石川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18-1 Tel 076-229-4477							
発行機関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いまはまはかたやまいせき 今浜墓田山 遺跡	いしのかほけん ほくいん 石川県羽咋郡 ほうだつしみずちょう 宝達志水町 いまはま 今浜	173860	30067	36度 49分 32秒	136度 45分 41秒	20030904～ 20031006	560㎡	県営ほ場 整備事業 (今浜地区)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
今浜墓田山 遺跡	集落跡	古墳時代	溝	土師器、須恵器				
			奈良～平安 (鞍部)	須恵器				
要約	本遺跡は奈良～平安時代とされていたが、今回の調査で古墳時代の土師器、7世紀前半に比定される須恵器が出土した。本遺跡は古墳時代から始まることが明らかになった。奈良～平安時代の土器だまりを検出したことから、砂丘上に当該期の集落の存在が窺える。							





調査区北部完露状況



張り出し部北側完露状況



張り出し部先端完露状況



2号土器だまり発露状況



鞍部2 両側検出状況



SD3 検出状況



SD4・5完露状況



柱穴列完露状況



2号土器だまり遺物出土状況



SD3土層断面



柱状図土層①



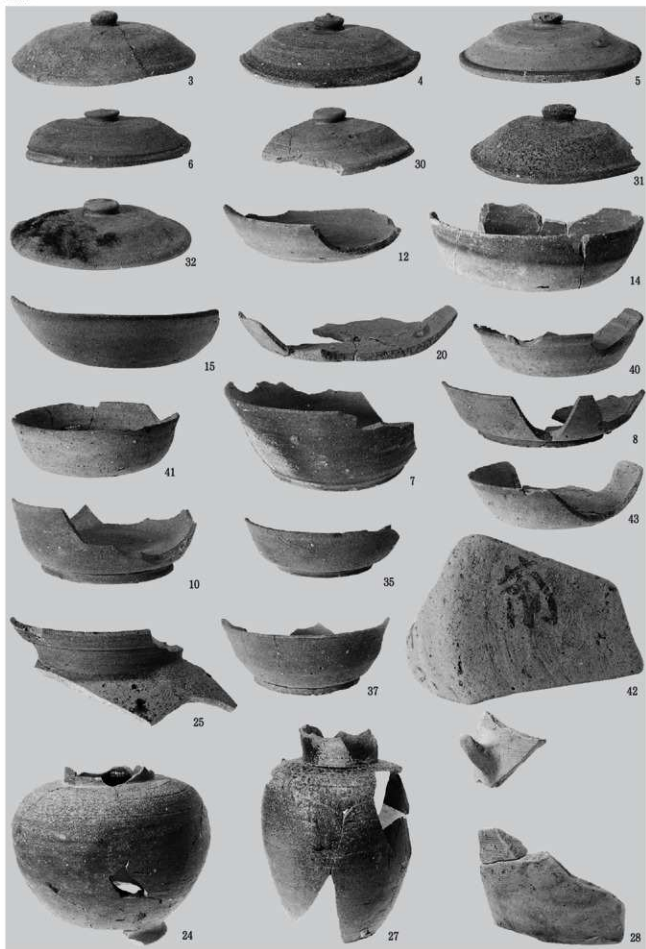
柱状図土層②



柱状図土層③



柱状図土層④



## 宝達志水町 今浜墓田山遺跡

発行日 平成17年（2005）3月31日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市鞍月1丁目1番地

電話 076-225-1842（文化財課）

財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 有限会社 栄光ラボラトリ